# ラオス事務所インターン報告



早稲田大学社会科学部3年 飯川桃子

# ■実施概要

期間:2014年8月19日~9月19日 8:30~17:00 (土日を除く週5日)

場所: ラオスのこどもラオス事務所 内容: ラオス事務所における業務補助

#### ■目標

ラオス事務所でのインターンを行うにあたって、目標を設定しました。

- (1) ラオス事務所ではどんな活動をしているのか、どんな役割を担っているのかを学びたい。
- ② 業務補助の体験を通じて、「日本人スタッフとラオス人スタッフ」が、また「ラオス事務所スタッフ と現地の人」が、どのように関わり協力しサポートしているのかを学びたい。

①と②をもとに、現地駐在員の本多さんと話し合った結果、ラオス人スタッフと一緒に作業に参加することで、スタッフと関係を築き、ラオスのこども(以下 ALC)の活動やラオスについて、ラオス人について、より理解を深める(その過程でラオス語をもっと上達させる)というのを日々の目標としました。

## ■図書室開設準備・フォローアップ準備

主に参加したのは、図書室開設準備の作業です。現在 JICA のプロジェクトで行われている、地域に根 ざした図書室開設を 16 校行うということで、その準備を行いました。また、過去三年間に開設された図 書室への本や文房具の補充を行うフォローアップの準備も行いました。

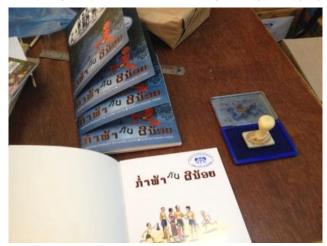
基本的な作業はどちらも同じで、贈る図書に貸出カードや分類シールを貼り、文房具をそろえて段ボールに詰めていく、その他の備品(看板や装飾品など)を数え、包装していき、送れる状態にするという作業でした。

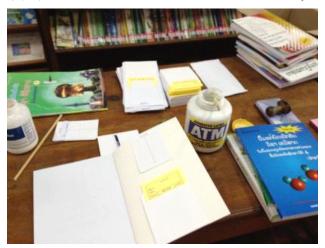
本の準備について。贈る本はバラエティに富んでいて、例えばラオスの民話や、図鑑、ドラえもんの 漫画、雑誌、ASEAN の挨拶や花などの本、新版の折り紙の本、仏教の本、日本語の本にラオス語の翻訳 シートが貼られた本などがありました。





その本に、まず ALC のスタンプと、各図書室の番号と学校名が彫られたスタンプを押していきました。





次に、貸出カードを入れるポケットと借りた日付を書いていく紙を、のりで貼っていきます。このとき、のりを多く使ってしまうと、本にのりがはみ出してくっついてしまうので、少量を伸ばすのがポイント。また、裏表紙に絵や文字があると、貼ってしまうと見えなくなるので、その場合はめくれるようにさらに紙をはさんで貼る。また、裏表紙の紙質がツルツルしている場合は、のりでなく両面テープで貼る。単に貸出カードを貼る作業だけでも、こんなに注意書きがあり、その分、とても丁寧に本を扱っていることが伺い知れます。

表紙には、下から 2.5cm のところに、本の通し番号と、本の種類を分別する色のシールを貼っていきます。本は、story book/中学生以上用の本/英語、タイ語、日本語、翻訳シートの本/雑誌と分けられています。

最後に、貸出カードとポケットに、本のタイトルと、通し番号、図書登録年(今年なら 14) と書いておしまいです。

本を図書室の物として登録するだけでも、こんなに多くの細かい作業が続き、準備に3か月を要するという意味が実感できました。いわゆる単純作業が続きますが、ラオス人はおしゃべりが大好き。作業中はいろんなおしゃべりが続くので、とても楽しいです。私もそこに混ぜてもらって、ALCの図書に関する活動のみならず、ラオスについても様々なことを知り、学ぶことができました。歳の近いスタッフとはプライベートでも仲良くなり、ラオスの若者が今どんなことを考えているのかを知ることができたのは、貴重な経験となりました。

#### ■昼休みのアクティビティ

12 時過ぎから 1 時半まで、学校の昼休みの時間になると、近くの学校に通う子ども達が来館します。 みな思い思いに本を取り、読んでいます。中学 4 年生(15 才)くらいになると雑誌が人気ですが、もう 少し小さい子どもだと、やはり民話などのお話が好きなようです。図書室には寄付していただいた日本 語の本も多くあります。ラオス語に翻訳されていない本でも、図鑑などは目で見て内容を理解できるた め、子ども達もよく読んでいます。





また、スタッフが主導して、毎日いろんなアクティビティが開催されます。

#### ・紙芝居や本の読み聞かせ

中学生になると聞きたがらないとスタッフは言っていましたが、実際紙芝居を読んでいるときは、 中学生もくいついて聞いていました。

# ・みんなで遊べる体を使ったゲーム

スマートフォンが普及する中で、ゲームに夢中になっている子ども達を見ていると、みんなで遊ぶ 方法を知れるというのは、非常に意味のあることだと思いました。

## ・なぞなぞ

子ども達は、頭で考えるきっかけになります。

#### ・折り紙

子ども達は折り紙が大好きです。何がしたい?とスタッフが聞くと、すぐに「折り紙したい!」と言っています。新しくALCから出版された折り紙の本も大活躍でした。

# ・塗り絵、お絵かき

自由なものを描いていいのに、みんな山・川・家・道・人という似たり寄ったりなラオスの田舎の 風景を描きます。不思議に思って、「なんでみんな似た絵を描くの?」とスタッフに聞くと、「先生 がこう描けと教えているわけではない。でもラオスの風景自体がどこも似ているから、子どもの絵 も似たものになってしまう。でもビエンチャンの都会の子どももこういう絵を描くのはなんでだろ うねえ」と言っていて、印象的でした。これからもっと子ども達の創造力を伸ばすにはどうしたら よいのか、私も考えたいです。





これらのアクティビティを通じて、子ども達は表現力や想像力、創造力、本へのさらなる興味、好奇心、社会性、思考力などを見につけられるため、ALCの図書室が持つ役割を実感できました。また、こういったアクティビティが図書室を中心に全国の学校でも多く行われたら(ALCのノウハウがもっと広まったら)、子ども達の良い成長の場になっていいなあと思いました。

#### ■ラオス語の翻訳シートが貼られた日本語の本

日本のボランティアさんが、日本語の本にラオス語の翻訳シートを貼って、ラオスに届けてくださった段ボールが ALC に到着したときのことです。

まず、私自身日本でもこの翻訳シートを貼るボランティアに参加したことがあったので、それが実際にラオスに届いた瞬間に立ち会えて、日本のボランティアの方々の想いに本当に感動しました。ラオスの子ども達のことを想って、本だけでなく、折り紙や鉛筆などの文房具も一緒に入れてくださっていて、はるばるラオスまで届けてくれるその温かい想いを感じ、本当にありがたいなあと思いました。

段ボールが届くと、スタッフは子ども達に、この本が日本のボランティアの方々から送られてきたことを説明します。そして、ありがたいねえと言って、子どもとスタッフで届いた本を手に写真を撮ります。こうすることで、ラオスの子ども達には、日本にラオスのことを想ってサポートしてくれる人がいるのだということを実感してもらえる。また、日本でボランティアをしてくださっている人に、この写真を贈ることで、実際に届いたんだ、と喜んでいただける。そしてまた、嬉しいから再びボランティアに参加するという良い循環ができるんだなあと実感しました。

#### ■理科実験

学生団体にいたときに、理科実験をする班に所属していたのを活かして、昼休みに糸電話を使って、「音は振動しているから聞こえる」というのを、教科書の文字だけではなく、実感してもらうというアクティビティを行いました。

土日を使ってアクティビティの流れを構想し、当日の午前中に、糸電話を作り、ホワイトボードに「音はどうして聞こえるの?」という今日のタイトルを書いて準備完了。

首都ビエンチャンの学校でも理科実験は行われていないようで、子ども達は想像以上に糸電話に興味を持って、聞こえる!震えている!と楽しく実感してくれました。実験の後は、身の回りの音(喉や車など)を挙げて、全部空気が振動して聞こえているんだよと、身の回りのことに結び付けました。







最後に、紙に実験の様子の絵と、感想を書いてもらいました。「音が振動して聞こえることが感じられて 嬉しい」などの感想文が書かれていました。

ラオスの子ども達は、特に理科算数が苦手と感じているそうなので、これを機会に「暗記ではなく、 考える教科」に興味をもってくれたら嬉しいです。





その数日後、スタッフから「子ども達が、糸電話を作りたいと言っているので、今日は糸電話を作るアクティビティをしよう」と提案があって作りました。アクティビティをきっかけに、子ども達が何かに興味を持って、何かをやってみたい、取り組みたいと思ってくれたことが本当に嬉しかったです。ALCは図書館なので、アクティビティとしての理科実験はあまり行われていないようですが、これを機に理科も取り入れられたら嬉しいです。また、現在ラオス語に翻訳された、理科実験の絵本(日本ではよくある、家でもできる簡単な理科実験集)はないので、いつか作られたらステキだなあと思いました。

#### ■図書室運営のワークショップ

2 校の中学校の先生が来て、ALC で図書室運営のワークショップが行われたので、私もそれを見学させてもらいました。

まずは図書登録に使う、テープなどの道具の説明でした。何のために使うか、どこでいくらで手に入るか、どう作るか、なければ何で代用できるか、など細かく説明していました。学生団体での活動を通して、学校の先生たちにとって、「あるものが手に入らない・作れない」という小さなことがネックになって、活動を諦めてしまうことがあると感じるので、そのようなラオス人の特性をわかっている同じラオス人のスタッフだからこそ、丁寧な説明をしているのだと感じました。

次に図書を識別する色と数字のシールの説明。そして、図書を借りる人の登録ノートの書き方の説明。 そして、貸出カードの書き方と、何の図書があって、いつ発行され作者はだれかなどの図書登録のノートの書き方の説明が続きました。

ワークショップに参加して、学校図書室開設時のワークショップがどんなふうに行われているのか、 理解することができました。図書登録がとても大変そうでしたが、先生たちはとても熱心にノートにメ モを書いてらっしゃって、スタッフも、とても丁寧に一つ一つ説明していたのが印象的です。





このようなノウハウは、ALC ラオス人スタッフしか持っていないし、ラオスのこどもの宝だなあと感じました。NGO の主役は現地の人。つまり、ラオス人が主導という言葉を一番実感した日でした。先生方も、同じラオス人だからか、不安な点もよく質問していました。スタッフも前に立って説明をしながら、自信をもって質問に答えていました。これは日本人にはできないし、彼らが思いっきり活動できるように、申請書を出したり、資金調達をしたり、活動を知ってもらうために広報をしたり、などという点でサポートしていくのが日本人の役割なのかなと感じました。

## ■インターンを終えて

毎日、ラオス人スタッフと和気あいあいと作業をして、その過程で活動への理解を深めたり、昼休みのアクティビティを通して、図書活動の意味を実感したり、とても充実した学びの1か月となりました。 NGO の活動に対する理解を深めると同時に、もう一つの収穫としてラオス人と良い関係を築くことができたということを挙げたいと思います。学生団体ではずっと支援する側としてラオスを訪れて、なんとかもっと対等な関係を築けないものかと苦戦していました。しかし今回初めて、支援する側でなく、インターン生として教えていただく身としてラオスを訪れ、毎日一緒に仕事をさせていただく中で、今までで一番ラオス人といい関係が築けたのではないかと考えています。そういう関係を築くことができ、ラオスの生活にどっぷり浸かることができたのは、かけがえのない経験だったなあと、思います。

また、駐在員の本多さんが日々ラオス人のスタッフさんやラオスについて考えていること、改善したいと思っていることをお話してくださって、またそれを垣間見れたのは、駐在員としての役割も伺うことができて、とても勉強になりました。本多さんのおっしゃっていた、「それぞれ役職で立場に差はあるかもしれないけど、人間としては同じ」という言葉が印象的です。

貴重な経験をさせていただいて、本当にありがとうございました。